
シルキーボイス

出雲そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シルキーボイス

【Nコード】

N2209C

【作者名】

出雲そら

【あらすじ】

最愛の父を失い、天涯孤独の身になった星野るい。彼女はずっと夢だった歌手になるため、東京へ。しかし、そこで出会ったのは、インチキボイストレーナーだった・・・

第1話：旅立ち

小高い山の上、誰もいない墓地でひとり手を合わせる少女がいる。

真夏の陽射しが容赦なく照りつけ、少女の額から汗が滴り落ちる。

「父ちゃん、ホントに今までありがとう。」

ちよっとこれからは遠くなっちゃうけど・・・夢を叶えるために、あたし、行くね！見守ってて」

少女の頬をつたうのは汗か涙か、それはきつと彼女にしかわからない。

すっくと勢いをつけて立ち上がった少女は、少し吹っ切れたような笑顔で、眩しい空を見上げた。

少女の名前は、星野るい。この春中学を卒業したばかりの16歳だ。

ちょうど半月ほど前の7月24日が彼女の誕生日だったが、過去16回の中で、一番淋しい誕生日となった。るいの父、洋二が7月22日、交通事故で亡くなったのだった。突然最愛の父を失ったるい。

その悲しみは海よりも深く、その小さな胸の奥に刻まれたことだろう。幼いころから、歌うことだけが好きだったるい。

まるで絹のようにしなやかで、優しい声は村でも評判だった。身長が150cmあるかどうかの小柄で華奢な体で、村民ホールいっぱいに響き渡る声を、中学2年の時に行なわれたフェスティバルで披露したこともある。

夏という季節に似つかわない、透き通るような白い肌。決して美人とは言えないが、どこか愛らしいオーラを持った少女だ。

小さなバッグとマンドリンケースをその小さな手で握り締め、
いは墓地をあとにし、駅へと向かった。

田舎の小さな駅には、本当にまわりに何もない。

るいが改札を通過しようとした、その瞬間大きな自転車のブレーキ音が鳴り響いた。

「るい！」

「丈くん！」

「どうしても行くのか？」

「うん・・・やっぱり夢を追いかけていの」

「淋しくなるけど・・・がんばれよ！またメールとかくれよな」

「うん、もちろんだよ」

「これ、持ってた欲しいんだ」

早瀬丈はポケットからギターピックを取り出して、るいの右手を
包み込むようにして渡した。

「あ、これ・・・」

るいの瞳が瞬間に潤んだ。
そこには丈の夢も託されているようだったからだ。

丈はるいと組んでいたポップスバンドへブローバックのギターストだった。

しかし丈はるいを襲った通り魔と争った時、左手に大怪我を負った。

左手の神経が戻らず、プロミュージシャンを目指せるほどのプレイは出来なくなったのだ。

その丈がいつも愛用していた〈CLAYTON〉のピック、そこにはるいの歌声に寄せる思い、丈の夢、色々なものが詰まっていた。

「ありがとう。大事にする。きっと夢を叶えるよ。

丈くんのためにも」

「オマエのためにだけがんばればいいんだよ」

「うん」

彼女は小さく頷くと、バレエのターンのようにしなやかに、素早く振り向いた。

そのまま彼女は振り返ることはなかった。

ホームに向かう目の前にはひとすじの涙が伝っていた。

田舎の2両の電車があったという間に、丈の視界からるいを消し去ってしまった。時の流れがまるで、DVDプレーヤーのスキップのように、あまりにも速く感じた。

立ちすくむ丈の背中に、真夏の太陽が、ただ照りつける、ただ照りつける。

第2話：業界の匂い

煙っぽい小さな居酒屋の一番奥の席。白っぽいスーツに黒シャツ。ノーネクタイでその襟は大きく開いている。

真壁新一は、個人レッスンのボイストレーナーをしている、45歳の男だ。

「ねえ真壁さん！そろそろドカーン！と一発当てましょうよ。こんなしみたれたところで飲んでるの、もう飽きましたよ」

やれろろつが回らなくなっているのは、イベントターの三室和也だ。三室は真壁より10歳年下で、いつも彼と飲みに行くと酔い潰れてしまう。

真壁を兄のように慕っている甘えからだろうか。

「フツ、そうは言ってもなあ。なかなかいいのがいねえんだよ！まつ、それに俺の歌唱力指導じゃ、そこまで育たないがな」

真壁は左の口角を上げてニヤリと笑った。

「じゃ、どっかの社長令嬢でもたぶらかしましょうよ」

「ああ、そうだな。じゃセレブ雑誌のコネでも探しておくよ」

「ハハハハッ！」

ふたりは大声で笑った。

次の瞬間派手な時代劇風の着信音が鳴り響いた。

「ん！？誰だろ？」

真壁は面倒臭そうな表情をしながら、ジャケットの内ポケットから携帯電話を取り出すと、すぐに通話ボタンを押した。

「もしもし！真壁センサー？」

電話の声はやたらと元気な若い女の声で、そばにいる三室にも会話が十分聞き取れるくらいに大きな声だった。

「おお！ミキちゃんか。どうしたの？」

「もお！どうしたじゃないでしょ！今晚来てくれるんじゃないかったの？ミキの誕生日に！」

「あつ、ああ。そうだったね・・・ごめんごめんちょっと打ち合せが長引いちゃってね。も、もうすぐ終わるから」

「じゃ、センサー、すぐに来てよ。待ってるから」

「あつ、ああわかった。わかったよ」

会話が途切れるかどうかのタイミングで電話を切った。

「また真壁さんの日替わりが始まった」

生徒から高額な授業料を受け取るだけではなく、何人もの生徒と淡い関係だった。

こうして真壁はそそくさとミキの元へと消えてしまったのだった。

第3話：東京へ

「品川く！品川く！」

新幹線の車内アナウンスが響く。

るいは慌てて荷物を持ち、ホームに降り立った。

伯母さんの家には、二度遊びに来たことがあるので東京は初めてではない。

しかし何度来ても人の多さには圧倒されてしまいうるいであった。

列車のドアが開いて、るいがの片足がホームに着いた途端ケータイが鳴った。

「ん？」

と、気を取られた瞬間、ドーンと右肩に痛みが走った。

倒れてしまうほど大きな衝撃ではなかったが、突然のことであるいは驚いた。

ホームを突っ走ってきた少女がぶつかってきたのだった。「あつ、ゴメン！」

少女は心のこもらない適当な謝り方で言った。

ブルーの髪が目立つ少女はちょうど同じ年頃のように見えた。

「あ、はい」

おっとりタイプのるいはよほどの事でない限り怒ることはない。

「るいちゃん！ん！ん！」

そこに伯母の声が聞こえた。振り返るとこのカスミも一緒だった。

「るいちゃん！久しぶりだね！」

カスミがキンキンした高い声で言った。

「そうだね、中学くらいから会ってないもんね」

るいは、自然にカスミの手を握り締めて言った。

「るいちゃん、すごく可愛くなったね！まるでアイドルみたい」

「えっ！？またあ！そんなことないよお。カスミこそすごく大人っぽくなったよ」

同い年のカスミとは昔から仲がいい。

「さあ！早く家に行こう。今日はるいちゃんが久しぶりに来るからって、ご馳走用意してるんだから！」

伯母の和子が二人を促すと、ホームを降りていった。

第4話：歌いはじめたるい

「さあ！着いたよ。お待たせ」

和子はコンパクトカーのサイドブレーキをギギッと引きながら、元氣いっぱいな声で言った。

家に入ると、テーブルに伯父の太一がニコニコしながら座っていた。「いやあ！るいちゃん！いらっしやい。さあさあ早くここに座んないよ！」

太一はせわしない声で言った。いつでもこの調子で、聞いている相手がきぜわしくなるので、いとこのカスミは、父のことを今ひとつ好きになれないでいた。そんなことから、るいが父親とすぐく仲良くしているのを、昔からとても羨ましくも思っていたのだった。

「さあ！食べて！食べて！お腹空いたでしょう。」

あっという間にエプロン姿になった和子が言った。

「わあー！スゴいごちそう！いただきまーす！」

るいは元氣に料理を食べはじめた。

「うーん、おーいしい！」

「相変わらず小さな体に似合わずよく食べるね。」

カスミがニヤニヤしながら言った。

「ところで歌はずっと続けてるの？ほら、たくさん曲作ってるって言ってたじゃない。」

和子は興味深そうな表情でたずねた。

「うん、ずっと歌ってたけど、父ちゃんの一件があってからは歌っ

てないんだ。やっぱりそういう気分になれなくて・・・」

るいは少し伏し目がちで言った。声には心なしか力がない。

「そりゃあ無理もないよ。家庭に何かありゃ、思い切り歌えないさ」

「うん。でも今日は何だか歌えそうな気がする。久しぶりに東京に出てきたし、カスミや伯父さん伯母さんにも会えたから」

少し無理をして明るい声を出したるいだが、声に出して宣言すること自分自身にも言い聞かせようとしたのだ。

「わあ！聞きたい！聞きたい！久しぶりにるいちゃんの歌。だってもう何年も聞いてないよ私」

るいのひとことで、小さな部屋の雰囲気が一気に明るくなった。

「じゃカスミの部屋で聞きましょう。あそこならピアノもあるし」

和子が待ちきれない様子で言った。

「ちょっと待って！今日って土曜日でしょ？近くのライブハウスが飛び入りOKの日よ！ほら、お母さん、このあいだ勇次がライブした店、覚えてるでしょ？あそこに行こうよ！どうせならいい音で聞きたいよ、るいちゃんの歌」カスミが目を輝かせながら言った。

「でもカスミ、そんな急に言ったらるいちゃんだって・・・なあ！心構えってものがあるだろうよ」

心配そうにるいの表情を見ながら、太一はカスミにそう言った。

「何言ってるの！急に歌うからこそ飛び入りなんじゃない。それにるいちゃんはたくさんステージ経験あるから大丈夫なの！」

カスミに強引に誘われた形ではあったが、るいは表情こそ苦笑いを浮かべていたが、胸の中はワクワクした気持ちでいっぱいだった。にぎやかに夕食を終えると、全員で車に乗り込み、カスミが言うライブハウスへと向かった。

第5話：運命の再会

車で走るとものの3分ほどで、目的地へ辿り着いた。

太一はコインパーキングに車を素早く停めた。

狭い路地を何度か曲がってライブハウスの近くまで来ると、店の前にたくさんの若者たちが行列をなしていた。

「うわっ！何これ？今日は誰か有名な人が出るのかなあ」

るいは行列の向こうにある店先の看板を見ようと、必死で背伸びしたり、体を左右に動かしてみたりした。そして微かに見えた看板に貼られた写真を見て、るいは驚いた。

なんとそれは今日、品川駅で、るいにぶつかってきたあの青い髪の少女だったのだ。

「今日は混んでるし、また今度にする？それとも違う店に行ってもいいし」

るいが驚いているうちに、和子がそんなことを言いだした。

「ううん、ここがいい！」

るいは少し強い口調で間髪入れずにそう言った。

「でもこの様子じゃ、るいちゃん飛び入りで歌うなんて無理じゃない？」

太一が少し心配そうに言った。

「私あの人の歌が聴きたいの！私の歌はまた今度ゆっくり聴かせるから、今日はこのライブが見たい！もしなんだったらおじさんやおばさんは帰ってもいいから」

駅でぶつかっただけの関係なのだから、取り立てて青い髪の少女に興味湧くほうが不思議なのだが、直感的に何かが磁石のよう惹き付けられるのを感じた。

「あれ？るいちゃんこのアーティスト知ってるの？」

「え？えへへ、まあね」

「じゃあ、パパとママは家でゆっくりしてて。こんなに混んできるとツライでしょ！わたしとるいちゃん、見に行くから。あとで電話するから迎えに来てネ！」

カスミはいつも通りのいたずらっこのような、愛敬のある笑顔で言った。

「じゃせっかくだから俺たちも見よ」

「いーの！いーの！年寄りは無理しないで！」

「ちょっと！おい！まだそんなに年寄りじゃないよ！」

「まあまあ、いいじゃないパパ。今日のところは若い子同士で楽しませてあげれば」

と、和子が太一をなだめる。

「チェッ！すぐに年寄り扱いすんだからな。まだまだ若いっつうの」

4人の笑顔が交錯して、少しほのぼのとした空気が流れたような気がした。

そしてるいとカスミは長い行列の最後尾に並んだ。

第6話：絹の声と風の声

ようやく開場の時間がおとずれて、ライブハウスの扉が開かれた。狭い扉の幅いっぱいには溢れる人ばかり。るい達の後方の列まで加えると、300人は下らないようである。

そもそも田舎育ちのるいは、人の多さで少し気分が悪くなってきた。

「ふう、やっとだなあ！待ちくたびれたよお・・・早くアイちゃんの《風の声》が聴きたいよ！」

廊下で折り返している長蛇の列で、ちようどるい達と向かい合う位置にいた少年が、溜め息混じりで呟いた。少年は見るところ18才か19才位くらいだろうか、真面目でおとなしそうな風貌で、秋葉原が似合いそうな大きなリュックサックを背負っている。

「ほんまやなあ。はよ聴きたいわあ。オレなんか一カ月に一回、アイちゃんの生の歌声聴くのんだけを生き甲斐に、毎日おもしろい仕事がんばってるねんからなあ」

もうひとりの男は少年と呼ぶには少し無理があるだろうか。20代前半くらいで関西弁、とても声も体も大きな男である。

「《風の声》かあ・・・どんな歌声なんだろう？」

るいは少年達の会話に、あの青い髪の少女、神木アイになおさら興味が湧いてきた。

「ねえねえ！るいちゃんどうしてこの神木アイって知ってるの？
そんなに有名なの？」

ひそひそ話のつもりでカスミは言ったが、もともと元気があり余ったような彼女の声は、周囲に内容が丸わかりなのであった。

その話に先ほどの関西弁の男がピクツと反応するのが、るいにはわかった。

「あれっ！？君らアイちゃんのこと何も知らんのにライブに来たん？
変わった奴ちゃんあ」

「あ、いや・・・その・・・」

気の弱いるいがおどおどしていると、カスミが角の立った声で言った。

「なによ！知らなきゃライブには来ちゃいけないって言うの？大体
神木アイなんて全然聞かない名前なんだもん！テレビにでも出てる
ってわけ？」

るいが困った表情でカスミのTシャツをつまんで制止しようとしていたが、その効果はまるでなく、マシンガンの弾のようにカスミの発する単語たちは次々に飛んでいってしまった。

「いやいや、来るのはエエけど我らがアイちゃんのこと、少しは知
つといて欲しいな！ 神木アイ1991年東京生まれ。徳間楽器テ
ィーンズポップスフェスティバルでグランプリ受賞。その爽やかな
癒しの声は《風の声》と呼ばれている。テレビの歌番組にも多数出
演してるでえ！知らなかったん？家にテレビないんちゃう？」

大男はおどけた調子で二人に言った。

「そうなんですか？　すごく有名な人なんですね！　すみません何も知らなくて」

「おい！　早く進めよ！」

るいたちの後方から怒鳴り声が聞こえた。ハッと気付くとするいたちの前が大きく空白になってしまっていた。

とりあえず見苦しかった言い争いにピリオドを打って、列に戻ったるいは慌てて前に進んだ。

開場されてから次々となだれ込む人波。ライブハウスの客席はそれほど広いスペースではなく、オールスタンディングでも、今日ほどの人数なら、ギュウギュウ詰めだろう。

るいとカスミは後ろから押されるように会場に進んだ。

「何よ！　あの関西弁のデカ男！　偉そうに。ホントムカつくよね！」

話しかけるカスミの声が何かのノイズにしか感じないほど、るいの頭の中は《風の声》というキーワードに占領されていた。るいがうわの空で、自分の話をまるで聞いていないのに気付いたカスミは、アメリカンコメディのように、小さくその両肩をすくめて苦笑いした。

「るいちゃん、どうしたの？　ボートとしちゃって」

「え？　う、ううん、何でもないよ」

るいは慌てて平静を装って返事をしたつもりだが、カスミからす

ればどう見ても挙動不審である。

「まさか！あいつらのどっちかに一目惚れ、なんかじゃないわよね？」

「バカ！何言ってるのよ！そんなのありえないよ！」

いったん我にかえったらい、今度はさっきとは打って変わって反応が早い。

「アハハ！そりゃそうだよね！」

二人の笑い声に重なるように、静かなピアノの旋律が鳴り響いた。静まりかえる会場に、耳障りの良い歌声がそつと語りかけるように広がる。それはまさに《風》のようだった。

そしてその声はこれまで父に連れられて、数多くのアマチュアライヴやプロのアーティストのコンサートに足を運んで来た星野るいが、これまでに聴いた声の中で最高に心地よいと確信した声だった。
・
・
・

第7話：忍び寄る魔の手

次々と観客の心をつかむメロディが流れてくる。 神木アイの歌声は、まさに風のごとく爽やかにライブハウスに響きわたった。 歌声が美しいだけではなく、その楽曲もまた素晴らしかった。 しっかりと包み込むようなバラード、そしてアップテンポのロック調のナンバーまで、キャッチーなフレーズでいて、何処か哀愁の漂うメロディだった。

「上手い・・・」

るいはほとんど放心状態でアイの歌声の虜になっていた。

じっとステージ上のアイを見つめるるい。その横顔を不敵な笑みで見つめる二人の男がいた。

「おい、あれだ」

真壁は三室の耳元で囁いた。

「なるほど」

三室はニヤリと笑うと、あらためてるいをまじまじと見つめた。

約一時間にわたる神木アイのライブは、るいにとってあまりにも短い時間にしか感じられなかった。

ステージは終了しても、ライブハウス中がまだ興奮さめやらぬ状態だった。

メジャーデビューしているとはいえ、まだ新人という立場の神木アイにとって、丁寧なファンサービスは欠かせないことである。ベテランアーティストのように、ステージが終わるや否や疾風の如く裏口から消える、というわけにはいかない。

エネルギーッシュなステージを終えてすぐ、会場入り口の前でCDの即売が行なわれたいた。

疲れた表情も見せずに、長蛇の列のファンに次々とサインと握手をするアイ。その表情は見事なステージで多くのナンバーを歌い切った、充実感溢れる笑顔で満たされていた。

普段ならば回転寿司や、スイーツの店でさえ、列に並ぶことを躊躇うるのだが、この日ばかりは違っていた。あまりの深い感動に、アイに一言かけたい一心で、ウンザリするような長い列のかなり後方に並んだのだ。もちろんCDを買い求めてあの素晴らしい

「風の声」をもう一度じっくり聴きたい、その思いも強かった。

るいは列に並びながら、今まで自分が歌ったステージを回想していた。確かに聴衆からはいい評価をもらってはいた。

しかし、あのアイほどの感動を皆んなに与えられただろうか？そんな思いがずっと回想シーンとリンクしていた。

るいは今すぐにでも人前で思い切り歌いたい衝動に駆られていた。それほどアイの歌声はるいの体中に電流のようなインパクトを与えたのであった。

「ねえ！るいちゃん、すごく良かったねえ、あの人の歌。私ビックリしちゃった」

カスミも興奮気味だ。

「うん、私すごく歌いたくなっちゃった」

るいのその言葉に何やら答えようと、カスミが一呼吸したその時、

「はい！次の人！どうぞ！」

と係員の声がして、るいとカスミはハッとした。考え事をしているうちにいつの間にか列はかなり進んでいたのだった。

いよいよアイの前に立つとなると、なんだかるいは少し緊張した面持ちになってしまった。

「どうもありがとう！」

アイが先手を取って声をかけてきた。そしてゆっくりと右手を差し出して微笑んだ。

「あ、ありがとう・・・」

るいは緊張して言葉に詰まってしまった。

「ハハハ！なんでるいちゃんがお礼言うのよ。変なの。」

カスミは口元を手で覆い、肩をすくめて笑った。

「あ、いや・・・す、すごく良かったです！風の声！」

そう言うのが精一杯のるいに、傍らからカスミがフォローした。

「ほら、るいちゃん。CD買うんじゃないの？」

「あ、そ、そうだった。CD一枚下さい。」

「はい！ありがとうございます！」

アイはスラスラとサインをすると、パッとペンを止めた。

「お名前は？」

ようやく落ち着きを取り戻してきたるいは、いつも通りのハキハキした声で答えた。

「るいです！星野るい。」

「可愛い名前ね。漢字はどう書くの？」

「お空の星に野原の野、るいは平仮名です。」

「キャハハ！幼稚園の先生みたいな説明ね！」

アイはイタズラっぽく笑うとサインを続けた。そして唐突に、

「あなたも音楽やってるんでしょ？」と聞いた。

「えっ！？どうしてわかるんですか？」

「私けっこう客席しっかり見てるの。聴いている時のリズムの取り方とかで、大体わかるのよ。」

「そうなんですか？ スゴい！」

「バンドとかやってるの？」

「いえ、今はやってないんです。でもアイさんの歌聴いたら、ものすごく歌いたくなりました。だからすぐ活動開始します！」

るいは飛び切りの笑顔で言い放った。

「ふーん、ボーカルなんだ。声かわいいからいいかもね。がんばってね！」

るいたちは列のかなり後方に並んでいたはずだが、まだ数人のファンが待っているのに気付いた。

「ありがとう！ これからも頑張ってください！」

るいは明るくアイに声をかけると、出口に颯爽と向かった。ライブハウスの階段を昇り、地上に出るとアイのファンたちもすでにほとんど残っていなかった。

「ねえ！ 君たち。」

後方から呼び掛ける声に振り向くと、そこには中年男が二人作り笑顔を纏って立っていた。

第8話：オーディション決定

「はい、なんですか？」

素直なるとはいはい反射的に返事をしてしまう。ずっと東京で育ったカスミは、るといとは対照的に警戒心をあらわにした表情で、心配そうにるとを見つめている。

「そっちの小柄で可愛いお嬢さん。君は音楽やってるんでしょ？」

「やだ！この人たちさっきアイさんとしやべってるの聞いていたのよ！」

カスミが露骨に不快感を表して言った。どうもカスミはまず敵対するクセがついてしまっているようだ。そのクセ一旦信じると何もかも信じてしまう、それが玉にキズであった。

「いやいや、確かにお二人の会話は聞こえてしまっていたけど、会場で見かけた時から、僕たちもそれくらいは気付いていたんだよ。」

すかさず、そう弁解しながら真壁はジャケットの内ポケットから名刺を取出し、慣れた手つきでるとにそつと差し出した。

そのスムーズさは紳士的にそして優しさをうまく醸し出していた。るとは名刺を受け取るとすぐ、表の名前と裏面も確認した。そこには、

《芸能プロダクション響・新人発掘専門》

と書かれていた。

「僕たちは新しい才能をいつも探してるんだ。それでいつもたくさんのライブハウスやイベントに足を運んでいる」

真壁はるいが名刺を確認出来る間を、少しおいてから話だした。となりで三上は笑顔で小さく頷いている。るいが何も話さないでいると真壁は続けた。

「君がアイの歌を聴いている時の雰囲気で直感した。君はスターになる素質がある。良かったら一度君の歌をゆっくり聴かせて欲しい」

真壁が話す僅かな時間に、るいの手からさり気なく名刺を取っていたカスミは半信半疑な表情で、状況を見つめている。

「来週の土曜日は少し時間を取れないかな？」

「えっと・・・何もなかったよね？」

るいはカスミの方を向いて確認したが、東京に来たばかりで何もこの先の予定など考えていなかったのだから、カスミは笑いだしそうになりながら、小さく頷いた。

「じゃ決まりだ！午後1時にオフィスに来て下さい。特に何も持って来なくていいから」

るいのイエスの答えを待たずに真壁はさっそく時間を決めてしまった。

「あ、あの！私もついていいですか？」

慌ててカスミが切り出した。やっぱり疑ってるんだなという表情を一瞬浮かべた真壁だったが、すぐにそれをかき消すように努めて優しい声で、

「もちろん！是非一緒に来て下さい」

そうして土曜日の小さなオーディションが決まった。真壁とるいはお互いの連絡先を交わして別れた。田舎とは全く別の星なのではと思うほど、ぼんやりと霞んだ東京の月が下町の中途半端なネオンたちと入り交じって、二人を微かに照らしていた。駅までの道のりは何故か交わす言葉も少なくなっただけとカスミ。

るいの胸には期待と不安がマーブル模様のように、複雑にそして混濁と入り交じっているのであった。

白い天井が眩しげにるいの視界に入ってきた。一瞬の違和感はずぐに彼女の中で溶かされて、カスミの家で目覚めたことを寝呆けた頭ながら理解した。

「ふあゝあ。何時だろう？」

大きな欠伸をしながら、るいは時計を探した。勝手のわからない家で、瞬時に時計を発見出来なかったるいは、自分の携帯をその手に掴んだ。

〈10・45〉

「エーッ！もうこんな時間！？」

るいは飛び上がるようにベッドから出ると、部屋着に着替えて階

段を降りた。1階のダイニングでは、伯父の太一と和子がテーブルに座っていた。

「るいちゃん、オーディション受けるんだって？」

太一が興味深げに訊ねた。

るいは階段をまだ下りきらない内に質問されたので、あわてて答えた。

「あ、ああ。まあオーディションって言っても、とりあえず私の歌をプロダクションの人に聞いてもらうだけよ」

「いやいや、それでもすごいことじゃない！チャンスチャンス。がんばってらっしゃい」

和子が真面目な顔で言った。確かに降って湧いたような話だが、ここで認めてもらえれば突然デビュー！などという調子のいい想像を、頭の中では描いていたるいである。それがチャンスであることは充分に理解していた。

「あっ、そうだ、ほら！お前。あれは、アレ」

「ああ・・・、そ、そうね。でもアンタが渡してあげればいいじゃない。もともとはアンタがもらったものなんだから」

るいには二人の会話が全くつかめず、少しキョトンとした表情で、二人の顔を交互に見つめている。

「るいちゃん、ちょっと待ってなよ」

太一はそうるいに声をかけると奥の部屋へ急いで向かった。なにやらガタゴトと音がしているので、るいは太一が何をしているのか、とても気になった。

しばらくすると、今度はパタパタと何かを叩く音がしたかと思うと、慌ただしく太一が小走りで部屋に戻ってきた。

「いやあ、随分奥のほうにしまってたから、ホコリかぶってたよ。痛んではないと思うんだけどなあ」　そう言いながら太一は、運んできた年代物のギターケースをそっと開いた。

そこには、かなり年季の入ったギブソンのギターが入っていた。るいは思わず目を見張った。

「るいちゃん、これはね。洋ちゃんが、僕にくれたギターなんだよ。でも知っての通り僕は機械で怪我をしてから、弾けなくなったしまったんだ。　だからずっとしまったままだね」

「洋ちゃんが亡くなってしまって、このギターはやっぱりるいちゃんに弾いて欲しいねって、ふたりで話してたのよ」

和子は、るいを優しい目で見つめながら言った。

るいはケースからそっと、ギターを取り出すと、爪弾いてみた。錆びれた弦からは輝くような音色は放たれないものの、そこには何処か寂しげな響きがあった。

「るいちゃん、今マンドリンしか持っていないだろ？　やっぱりギター弾いて歌って欲しいんだよ、オレ。女の子の弾き語りって、好きなんだよね」

太一はぎこちない笑みをこぼしながら、自分の台詞に自ら相槌を打つように、大きく頷いた。　ギブソンのギターは、まるで洋一の

代わりに、るいに話しかけてくるようだった。

ふたりの申し出に、そっと頷くと、るいの目からすうっと涙がこぼれた。

真夏の朝の光が、カーテンのわずかな隙間から入り込んで、るいの頬を照らす。

それは小さなスポットライトのように、るいの愛らしさを増幅する。

天国の洋二からの贈り物だろう、太一と和子は言葉にせずとも、全く同じことを考えていた。

不思議な老人との出会い

いよいよオーディションを3日後に控えた、水曜日の昼下がりに、いとカスミは駅前商店街の中にある、小さな楽器店に来ていた。ほんの数坪ほどの店内に、ところ狭しとギターが並べられている。店の奥にあるレジには、老人がひとり座っていた。ちようどるいやカスミの祖父のような年加減に見えるその老人は、かなり年季の入ったギターを丁寧に手入れしていた。

「あのー、すみません。ギターの弦欲しいんですけど」

「ふむ。どんなギターかね？」

「ええっと、普通のフォークギターです」

「普通の？それじゃよくわからんなあ。女の子じゃからショートスケールのギターかい？」

老人は怪訝な表情で尋ねた。るいは楽器に詳しくないので、困惑した様子で沈黙してしまった。すると、すかさず次の質問が飛んできた。

「家は近くかね？」

「え？ええまあ・・・」

まさかとても遠方とも言えず、るいはそう答えた。

「じゃ、持って来なさい」

「はあ！ふえー！もう！すごく重いじゃない。だからあの店はイヤだって言ったの！あのジジイ本当に偏屈で有名なんだから」

ハードタイプのギターケースを持ったるいを乗せて、自転車をこぐカスミはブツブツと文句を言い続けた。二人乗りの自転車はやや空気の不足しているタイヤからノイズを出しながら、フラフラの蛇行運転を続けた。

ようやく楽器店にたどり着くと、カスミはすぐさま店のガラス戸を押し開けて叫んだ。

「はいっ！持って来ましたよお！」

と、なかばヤケクソ気味に言った。

さっそく持ち込んだ父の形見であるギターを、老人に手渡すと、彼の表情がさっと変化するのを、二人は感じ取った。そして更にじつくりとそのギターの細部に渡るまで、一通り眺めると、彼はるいに尋ねた。

「いったい、このギターをどこで手に入れたんじゃない？」

「父の形見なんです」

「ほお！そうかね。ギブソンというメーカーのギターでな・・・」

（そんなのロゴ見りゃわかるよ）

カスミは横を向きながら小声で言った。

そんな場の空気にお構いなく、老人は続けた。

「なかなか珍しいモデルじゃぞ！これは。あんたみたいに小さな娘さんに弾きこなせるかねえ？」

「そんなに高いギターなんですか？」

「有名なミュージシャンのギターを再現したモデルでな、値段も相当にするが、

何よりいい音がするじゃろうな、これは」

「へえ！そうなんだ。おじさんいいギター持ってたんだね。うちのパパにはもったいないヨ」

「これほどの代物じゃからなあ。いい弦を張ってやりなさい。そうじゃなあ、このあたりがいいじゃろう」

そう言いながら、老人はこじんまりとした棚から、弦を1セット取り出した。するとそそくさと今張ってある、錆びれた弦を外しはじめた。そして慣れた手つきで新しい弦を張ってゆく。るいの記

憶の中で、これは。老人の姿と、父の姿がオーバーラップしていた。ほんの数分の間で生まれ変わったギターを、老人は抱えると音叉をコツン叩くチューニングを合わせた。

「これでよし、っと」

自分に言い聞かせるように呟いた老人は、おもむろにギターを爪弾いた。

なんとも言えない切ない響きが店の中に広がった。その音色は暖かく、そしてるいにとっても懐かしい響きであった。

「はい、どうぞ」

ニツコリと微笑みながら、老人はるいにギターを手渡した。老人はさつきまでとは打って変わって、いいギターを手にしたからか、上機嫌な様子であった。

るいは手渡されたギターをしんみりと、そして少し気恥ずかしそうに弾いた。そもそも楽器の腕前にはあまり自信のないいは、その音色もどこか控え目に聞こえた。

「うーん、なっちょらんなあ。まだまだじゃ」

「あの、私まだまだ練習出来てなくて。それにギターが専門じゃなくて、ボーカルなんです」

「じゃ今バンドでも組んでいるのかい？」

「いえ、当分メンバー探すまでの間は弾き語りをしようと思っってます」

「わしの教室に来るかい？弾き語りのコツもしっかり教えてやるぞ

「！」

るいとカスミが顔を見合わせていると、老人はすぐそばにあった店のギターをおもむろに抱えた。

「どれ、じゃあ少し手本を聞かせてやろう」

そう言うとき老人はギターを爪弾き始めた。るいとカスミはどこかで聞いたイントロだとは思ったが、それが何と言うタイトルかは、わからなかった。

《I see trees of green
red rose too . . .

老人の爪弾くギターは、とても繊細で、美しい響きだった。そしてそのしゃがれた声も、何とも言えない哀愁が漂うようで、二人は身を乗り出して聞き入った。ワンコーラスを歌い上げると、老人は少し得意気な様子でギターを置くと、二人を優しい眼差しで見据えた。

「いくらですか？」

るいはが老人に尋ねる。

「ん？何がじゃ？」

「月謝です」

「おお！月謝の事か。5万じゃ」

「ええっ！高っ！」

思わずカスミが叫んだ。老人は悪戯っぽい微笑みを浮かべて続けた。

「定価は五万じゃが、そっちのお嬢さんは素直そうじゃから、特別に千円にしてやろう！ただし半年間の限定という事でな」

「今度はまた極端に安いね・・・」

カスミが苦笑いしながら言った。

「ありがとうございます！よろしくお願いします！」
るいはとても嬉しそうな表情だ。

「で、いつから来ればいいですか？」

「いつでもいいぞ。何なら今日からでも」

「じゃ、今からお願いします！」

「え？るいちゃん、本当にいいの？」

あまりの話の早さに、呆れたカスミだが、るいがどう答えるかは、聞くまでもないことはわかっていた。こうして始まったるいの弾き語りレッスン。傍らで見守るカスミもいつしか楽しげで、時間が経つのを忘れてしまうような、素敵な空間なのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2209c/>

シルキーボイス

2010年10月17日02時52分発行